



キヤツスル

No.484 2022年12月号 大阪城東福音教会

Merry Christmas ✨



「心を照らす世の光」

牧師 大倉 昭元

クリスマスとは直訳しますと「キリスト（救主）礼拝」となります。聖書に記されているクリスマス物語にはそのことが明らかにされています。主な三つの物語は夜に起こった出来事で、救主の誕生は、この世の闇に打ち勝つことを啓示しています。

ヨセフは婚約中のマリヤのお腹が大きくなることで疑いを持ち、離縁しようとしていました。暗い心のヨセフに対して、み使いが夢の中に現れ「マリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである」（マタイ 1:20）と告げました。ヨセフはマリヤから生れる子が救主であることを知り、不安な暗い心から解放され、救主の誕生を待ち望みました。

羊飼いたちは動物を世話するために安息日を守ることができません。そのため当時の社会では見下げられていました。そのような彼らにみ使いが現われ「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びをあなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった」（ルカ 2:10,11）と語りました。人々から見下げられ、くじけた心や劣等感を持っていた心も救いの明るい光がさし、飼葉おけに寝かされた幼な子イエス様を礼拝しました。



博士たちは星に導かれ、バビロニアの地からやってきました。博士という言葉は「マギ」となっています。彼らは王の側において、星を占うことで王に国政全般のアドバイスをしていました。星に詳しい彼らは一つの光り輝く星を見たことで、さまざまな文献から、ユダヤの地に救主が誕生したことを見出し、長い旅をしてエルサレムにやって来ました。そこで聖書から、救主の誕生の地がベツレヘムであることを知らされ、その地で幼な子イエス様に会い、贈り物を捧げ、礼拝をしました。

心にはさまざまな闇の部分があります。それを抱えて生きることは人生の重荷となっていくのです。暗い心の領域であっても、そこに光が輝けば明るくなります。占う心も、劣等感の心も、不安な心にも真の光が必要です。

イエス様は「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」（ヨハネ 8:12）といわれました。イエス様は真の光です。イエス様を救主と信じて、心を明るくされて、クリスマスをお祝いしようではありませんか。

*大阪城東福音教会記念誌『福音のしもべ』より 2004年12月号大倉昭元牧師のクリスマスメッセージを掲載いたしました。[テキスト版はここをクリックしてください。](#)